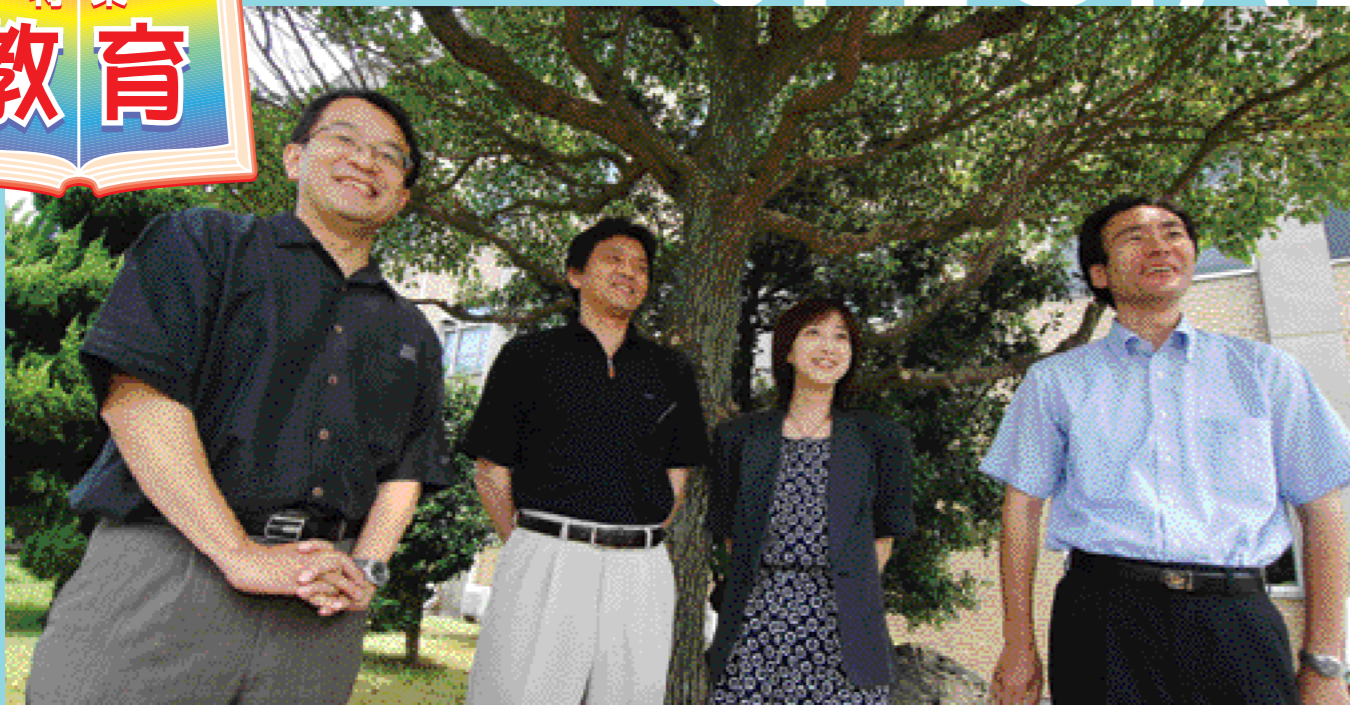




教える、とは未来を共に語ること、学ぶ、とは誠実(まこと)を胸に刻むこと(レイ・チャペル)



三重大学教育学部・教授
Moriwaki, Takeo 森脇 健夫
[URL] <http://www.cc.mie-u.ac.jp/~jugyoron/>

力量ある教師を育てたい

『教師という仕事は
○○のようなものである。
なぜならば××だから』

そこにどんな文字を入れるか、でその人の「教師」に対するイメージが浮かび上がります。

よくこの比喩で用いられるのが、「ブーメラン」です。「教えるという仕事は、投げた手に必ず舞い戻ってくるブーメランである」(ウォーラー 1932)。「教えること」と「学ぶこと」が「循環する」教師の仕事の本質の一端を言い当てているのではないのでしょうか。

私たち教育学部の教員は、教師の卵を育てています。そして同時に私たちも教師です。

このことが、私たち教育学部教員の宿命なのです。私たちの仕事は、いつ

でも「ブーメラン」のように戻ってきます。そしてそれは二重にも三重にも戻ってくるのです。

教育学部に入ってきた学生は、4年間で教員免許を取得し、卒業したそのあくる月には、子どもたちに「せんせい」と呼ばれる存在になります。初任者ですが、一人前としての教師として、学級の子供たちに責任を持ち、同僚、管理職、親、地域と良好な関係を築かなければなりません。そして日本の現在の教育現実は、けっして「甘い」ものではありません。学級崩壊、いじめ、不登校、低学力問題、教育現場における問題は、いずれも一筋縄ではいかない問題です。

私たちは、厳しい学校現場に飛び込んでも、希望を失わずにねばり強く、子どもに働きかけ、小さくても現実を変

えていける専門的な力量を持った教師を育てたいと願っています。そのためにも教員養成学部として何ができるか、考え続けています。

「教師は五者(学者、医者、易者、役者、芸者)でなければならない」と言われるように、教師としての専門的力はきわめて総合的なものであり、科学的な知と同時に実践知を必要としています。とくに実践知については、本来は実践経験の中で身につけていくものです。

大学においても、さまざまな現場と連携し、現場における問題を共同で解決し、現場に文化的な「材」を持ち込むという活動を通して、実践の知を獲得することに挑戦し始めています。その具体的な例を3人の先生方に紹介してもらおうと思います。

(上写真/左から、森脇教授、山本教授、根津助教授、岡野助教授)

「体育」って、面白い！
「おもしろさ」(interesting)
探求の水先案内人

三重大学教育学部・教授
Yamamoto, Toshihiko 山本 俊彦
[URL] <http://www.cc.mie-u.ac.jp/~ln20104/index.htm>



▲小学校専門体育Ⅰの授業開き(第1時間目)

「鬼ごっこ」、「キャッチボール」…昔からの子供たちの遊びです。ボールを投げる、受ける…人と人が運動を介してふれあうことで楽しさ、「おもしろさ」(interesting)を体験することができます。友達がそばにいて、道具も場所も選ばなくても、運動をすることができます。

私の授業では、学生達が自分自身で体験することにより、運動が好きの子供だけでなく、嫌いな子供たちにもその楽しさを伝えることができるように工夫するためへの取組として、学生自身が教師となって小学校の体育の授業で教えることを想定したアイデアコンペを行います。そこには、子供たちを夢中にさせる工夫や、オリジナリティが求められます。

学生達は与えられた課題をこなすのではなく、自分自身の体験を通して、運動の楽しさをどうやって伝えていったらいいかを学びます。



▲小学校専門体育Ⅰの授業の様子、人間いすで歩く

教師の仕事とは
「学び」続けること。
自分と向き合い、
自分を育てていく

三重大学教育学部・助教授
Okano, Noboru 岡野 昇



▲小学校専門体育Ⅰの最終授業

私が取組を進めている教員養成カリキュラムは、「自己形成カリキュラム」です。これは、学生と社会をつなぎ、他者と交わり、意味を紡ぎだし、自己アイデンティティと職業アイデンティティを育てていくという学生自身の「自己形成=学び」を誘発するカリキュラムのことで、とりわけ、学生と教員(私)の対話、学生相互の対話、対象世界との対話、自己(学習者である学生自身)との対話といった「対話」を重視する授業実践を展開しています。

これは、大学教育の「講義」に対する考え方を見直そうとすることでもあります。すなわち、「講義=一方向的に教授する場所」を「授業=学生と共に創りあげていく場」として位置づけようとする試みです。例えば、「小学校専門体育」や「小学校専門生活」では、①「テーマ・探求・共有」型の授業展開、②「小専体育(生活)ノート(個人ポートフォリオ)」の作成、③「小専体育(生活)授業通信」の発行、④「アイデア授業づくり」の実施、⑤「自己評価・授業評価」の実施などを行っています。

私は、こうした対話的実践の中で、自分と向き合い、自分を育てていくことができるような学生を一人でも多く学校教育現場に送り出したいと思っていますし、そのことが小学校教育現場から大学教育現場に転じた私のアイデンティティでもあります。

Silenceを感じ、聴きとる力
教師の仕事とは、
一人一人の心の色、
音色をのせる「パレット」(palette)

三重大学教育学部・助教授
Nezu, Chikako 根津 知佳子
[URL] <http://www2.odn.ne.jp/~cks30960>



▲美術・音楽・「ものづくり」を融合させたオリジナルの楽器を考える

私の授業では、対象となる子ども達を想定した上で、どのような活動や楽器が子ども達にとって適切で魅力的なのかを学生同士が考える教室型授業と、実際に子ども達と直接触れ合う現場型の体験授業を行っています。例えば「小学校3年生にわかりやすい楽譜をつくる」という課題をグループで考え、その楽譜を用いた実践を行います。机上でイメージした子ども像と、実際の子どもの反応は必ずしも一致しません。学生達が戸惑っている時は、できる限り見守ります。学生達は子ども達が何を感じているのかを読み取る努力をし、充実した活動を展開するために「知」を働かせます。そして、言葉だけではなく、からだの動きや表情を読み取るうとし、silenceに耳を傾けることの大切さを学ぶのです。

空のみどり、山のみどり、海のみどり(三翠)に囲まれた「自然」の中で学ぶ三重大生だからこそ、子ども達が「自然体」を感じているモノ・コトに丁寧に耳を傾け、子ども同士の手で、彩りや重なりを創り出していくためにはどうしたらよいか、考え続けて欲しいと思います。



▲「世界に一つだけの楽器」の誕生 子ども達と学生の手型がひとつになったクーグルバーン(玉の道)